

心のつながり・心の充足をこそ

清水 美智子

今からほぼ十年前、保育学年報（一九七一・七年版）の中で、私は「これから保育内容」に対する提言をしたことがある。

一九六〇年代は、知識爆発時代、宇宙科学時代の幕明けを騒がれ、教育もこの時代にあった内容にするべしと、教育の現代化・科学化のかけ声が喧しかった。小・中学校では最先端のことをあれどこれも教えようと教育内容を盛り沢山にした結

果、消化不良の子どもたちが続出するに至った。より可能性にとんだ幼児のうちにこそ多くのことを学ばせることができると、知的早教育への期待が財界からもよせられて、幼児教育振興策がとられ、就園率は急速に高まっていった。

あの科学化・現代化の過熱現象の中で疑問をもち続けていた幼児教育関係者も少くなかつたと思うが、私もその一人であった。その思いが、前記

の提言をした理由でもあった。

やがてあの種のブームはおさまって、小中学校の教育課程もつめこみからゆとりの教育へと転換するに至った。

一体、あの騒ぎは何をもたらしたのか、あの当時の公教育をうけねばならなかつた子どもたちの被つた損害を、誰が償うのだろう。

当時乱立した幼稚園は、今出生率の低下から園児が集まらないという現象が出ている。生き残るために園児集めの目玉商品が必要だとか、あそこでは○○の習いことができる、あの園は保育時間が長い、通園バスがある、給食がある等と、保育観や保育内容ではなく親の手抜きがどれだけできるか、で選ぶ親が多いと嘆いている保育者に会つた。

二才から水泳教室に通わせた四才児だが、最近行くのを嫌がるようになつた。何級になるまでや

めてはいけないと励ましているものの、これでいいのでしょうかという母親の相談を受けたことがある。そういうえば、私の近隣でも水泳教室のバスが年中走つていて、幼い子が送り迎えされる。自転車やバイクの荷台に子どもを積んで、児童教室に送り届けている光景も目に見える。今は知育以外に、あるいは以前に体力づくりが大切という風潮のようだ。

知育といい、体育といい、いずれも親の役目はお金を出して子どもを「専門家」のところに連れいくことである。経済的に豊かな時代、教育産業の栄える時代の家庭教育の内実に思いが及ぶ。

数少ない子どもとして生まれ大切にされているようでいて、実は手塩にかけていくしみ育てられるという情感とは縁遠いところにおかれている。今の子どもたちはすい分淋しい思いをしていふのではなかろうか。外側からみた出来栄え、能

力の高低、学習効率のよさ等に価値をおいて評価する眼に早くから開まれ、子どもの心は空しくおびえているのではなかろうか。

子どもの心が何を求めているのか、本来じつくりつき合いながら育ててくればわかるようになるはずなのだが、最近は外からの刺激が多くて、子どもも親も注意がそらされてしまつてじっくりつき合った経験が乏しい。親はどうやって遊び相手になつたらいいか、つき合い方のわからない不安から、少しでも保育時間の長い園に入れよう、○○教室にも通わせようと他人まかせの姿勢により傾く。

こうした背景を考えると、園では子どもとの心のつながりを深める保育を開いてほしい。保育者はひとりの子どもが自分の心の求むるまゝに活動することを認め見守り、そこからうまれてくる

ものを共に味わつてほしい。マイクを通した音声ではなく、子どもと同じ大きさの肉声で語りかけ、子どもの目の高さでうけとめてほしい。子どもには、歩みは遅くとも自分の足で歩きとおせたような心の充足を味わわせてやりたい。大地と大気に親しみ、四季の移ろいを全身で感じられるような自然とのつき合いを体験させてやりたい。

そして保育参観のやり方を変え、日々交代で二、三人の母親が保育の中に入り、このような子どもたちの生きる世界を体験してもらう。生まの子どもとつき合う時間を母親の人生にとり戻してもらうように。

現代には、こんな試みも必要なのではないかと考え思う。

(大阪教育大学)